＜実践報告・資料＞

図書館企画展の成果とその要因の考察

—職業能力開発総合大学校図書館の実践から—

職業能力開発総合大学校　村越　貞之
職業能力開発総合大学校　廣木　菜穂美

Reflection on the results of library exhibitions and their factors
~ From the Practice of the library of The Polytechnic University of Japan ~

MURAKOSHI Sadayuki, HIROKI Naomi

要約　職業能力開発総合大学校図書館では、学生の興味・関心を喚起して学習や研究に向かわせること、地域住民に生涯学習の機会を提供すること、を目的に2022年度（第1回）から図書館企画展を開催している。2023年度（第2回）図書館企画展では、新聞報道の効果から想定の範囲を越える地域から見学者が来館され、これまでで最多の見学者数を記録した。本稿では、企画展の意義の再認識や、効果的な企画展の実践に役立てることを目的に、累計545人の見学者を記録した2023年度（第2回）企画展を特に取り上げ、同企画展の実践を振り返り、同企画展の成果とその成果をもたらした要因を考察した。その結果、同企画展が、①地域への貢献と学生の教育への寄与、②図書館機能の向上という成果に加えて、貴重な資料の寄贈（収集・保存）へとつながる③人的ネットワークの構築という、併せて3つの成果を挙げたことが整理できた。そして、それらの成果は、①新聞報道、②図書館員と見学者のコミュニケーション、③図書館の主体的、能動的サービスの実践、という3つの要因によってもたらされたことが明らかになった。

Ⅰ　はじめに

職業能力開発総合大学校図書館（以下「PTU図書館」という）では、2022年度（第1回）から図書館企画展を開催している（表1）。図書館企画展とは、テーマに関する資料を自館や連携する機関等から収集・整理して展示物にまとめ、図書館の一角に一定期間展示する方法で学習機会を提供するものである。

大学図書館における学習支援機能は高度情報社会の進展と相俟って、高等教育における質保証や、アクティブ・ラーニング促進の動きの中で注目されている[(1)]。

特に、米澤は、本稿のテーマである図書館企画展の意義について、次の5点を挙げている[(2)]。

⑴学生の興味・関心を喚起し、知識欲をかきたてる。
⑵展示から啓発された学生を学習に向かわせる。
⑶図書館の役割を理解させ、資料の利用を促進する。
⑷地域住民の生涯学習の機会にもなる。
⑸図書館内の活性化、館員の企画力の育成の場になる。

表1　PTU図書館企画展開催一覧表

2025. 4. 30現在

年度	回	テーマ	タイトル	開催期間
2022	第1回	玉川上水	玉川上水の整備にみる歴史と技術	2022年11月19日～12月 2日
2023	第2回 第1部 第2部 第3部	電気自動車	図書館資料から紐解く我が国電気自動車開発の歴史 1940年代日本の電気自動車開発、それは「たま」から始まった 忽然と街頭から姿を消す電気自動車、一体何があったのか？ 環境問題やSDGsで、再び脚光を浴びる電気自動車	2023年 7月23日～ 9月15日 2023年11月11日～12月15日 2024年 2月19日～ 3月24日
2024	第3回	武蔵野の環境と文化	崖（ハケ）と湧水が創った武蔵野の文化 ー鈴木遺跡、うどん、そして湧水発電ー	2024年 7月28日～ 9月13日
2024	第4回	戦後の自動車産業	2人の航空機技術者が創ったクルマ ー高度経済成長を支えた自動車産業の一端を探るー	2024年11月 9日～12月13日
2025	第5回	西武線「小川駅」	西武線「小川駅」今昔物語（仮題）	2025年11月 8日～12月12日（予定）

論文受付日　R7. 4. 30

また、先行研究から図書館企画展の取組みを調査してみると、小林によれば、島根大学附属図書館では2014年度から毎年「戦争と平和を考える」というテーマで企画展を開催している。2017年度は地域の戦争体験記を公共図書館等の協力を得て収集し、「本を手に取り読んでもらう」ことをメインにした構成で、広く一般市民にも開放して平和教育の機会を提供した。

小林はアンケート結果の分析から、見学者の半数は学外の市民であったこと、口コミで見学に来る人が多いことが判明し、手記、手帳、寄せ書きなど実物が印象に残ったとの感想があったことを挙げている。また、実物展示を増やすこと、ゆっくり読める工夫が今後の課題であると言う(3)。

さらに、鯨井は、国立音楽大学附属図書館の企画展を、ゼミの研究成果発表の場に活用している。学生が図書館員と企画展のテーマ、内容を調整して、展示スペースの制約を考慮しつつゼミでの研究成果を整理し、展示物にまとめて発表した。学生には、研究成果を展示物にまとめる作業を通じてより理解を深めるという効果が期待できる。

一方、反省点や課題として、視覚に寄り添う資料作り（文字の大きさや字体の工夫など）、スケジュール管理（インタビュー調査と展示物作成・確認の時間的余裕がない）、学生間の研究テーマに関する共通認識の維持（各展示物の統一性の確保）、の3点が学生から挙がったと言う(4)。

このように、図書館企画展の実践をそれぞれに積み上げその成果や課題を報告・共有することは、企画展の意義を再認識させるとともに、企画展の効果的な実践に役立てられるのではなかろうか。本稿では、特に大きな成果を挙げた第2回PTU図書館企画展の実践を振り返り、その成果と成果をもたらした要因を考察するとともに、今後の展望と課題についても報告する。

Ⅱ　第2回PTU図書館企画展の概要

ここでは、2023年度に開催した第2回PTU図書館企画展の概要を紹介する。

1　図書館企画展開催の背景

PTU図書館では、職業訓練指導員や生産現場の指導者には科学・技術の方向性に対する正しい認識と地域貢献意識が欠かせないという問題意識とともに、地域住民に生涯学習の場を提供して社会貢献の役割を果たす意図から、「日本人の科学的思考力、科学的な知識、創造力の高さを、多摩地方の文化財を通じて知る」というコンセプトの下、2022年度から図書館企画展を毎年継続して開催している。

図1「たま電気自動車セダン」
写真出典：日産自動車(株)

第2回企画展で「たま電気自動車」（図1）を取り上げることになったきっかけは、構想中の2023年2月、九州産業大学図書館から届いた『自動車技術會報』第2巻第4号（1949）などの文献複写依頼であった。内容に興味を持った筆者らが資料を読むと、日本の高性能電気自動車の開発は1940年代に始まり、「日本政府（商工省、現在の経済産業省）は電気自動車を普及させ物流網の再生を構想していた」、日本の自動車保有台数10万台時代の1949年当時、「5年間で電気自動車を35,400台製造する計画が策定されていた」など数々の驚くべき事実が確認できた。筆者らの驚きと興奮を多くの方々に伝えたいと思ったことが端緒であった。

2　第2回企画展の構成

第2回企画展は、3部構成で次のとおり開催した。

第1部（2023年7月23日～9月15日開催）のタイトルは「1940年代 日本の電気自動車開発、それは『たま』から始まった」とし、高い技術力と技能を有する東京電気自動車（のちのプリンス自動車工業）の技術者が、戦後の混乱期に高性能電気自動車を開発していた事実を紹介した。

第2部（2023年11月11日～12月15日開催）のタイトルは「忽然と街頭から姿を消す電気自動車、一体何があったのか？」とし、高性能電気自動車が10年ほどの期間で街頭から消えてしまった理由を探った。

第3部（2024年2月19日～3月24日開催）のタイトルは「環境問題やSDGsで、再び脚光を浴びる電気自動車」とし、第1部・第2部の振り返りと、まとめの意味を込めて技術の継承、技能の伝承の重要性を伝えることとした。

3　展示内容

第2回企画展の主な展示内容は次のとおりである。

⑴　展示パネル

展示パネルは収集資料を1つ1つ紐解きながら、①第2次世界大戦後の混乱期に電気自動車が製造されていた事実、また、②なぜ高性能電気自動車が10年ほどの期間で街頭から消えてしまったのか、そして、③今また電気自動車が注目されている中、紹介した事実から何を読み解くことができるのか、の3点をわかりやすく伝えることに工夫を凝らした。

⑵　現物資料やYouTube動画

見学者の興味・関心を喚起するとともに、現実感や迫真感（リアリティ）を伝えるため、PTU図書館が所蔵する資料や、YouTube動画を活用した。

①宮田應義：「我国の電気自動車とその将来性」，『自動車技術會報』第2巻，第4号，pp.44-45，(1949).

②通商産業省通商機械局車両部自動車課：「自動車生産計画について〔昭和26年度〕」，『自動車技術』，第5巻，第2号，pp.58-59，(1951).

③日産自動車：「たま電気自動車再生ヒストリー」，https://www.youtube.com/watch?v=7lgWym4DNsk

⑶　複写資料

「たま電気自動車」に関する学術論文、インタビュー記事を関連資料として展示した。

①石川和男：「忘れ去られた電気自動車の時代－わが国における第二次世界大戦前後の電気自動車環境－」，『専修商学論集』，第111号，pp.1-22，(2020).

②田中次郎：「キ74から『たま』電気自動車、歴代プリンス車の開発」，『自動車技術を築いたリーディングエンジニア』，自動車技術会，pp.301-320，(1996).

Ⅲ　第2回PTU図書館企画展における実践

ここでは、新聞報道後の反響と報道後の図書館の対応、貴重な資料の寄贈に至る経過など、第2回企画展実践の歩みを詳述する。

1　新聞報道を契機とした反響

第2回企画展第1部開催6日目、東京新聞（76年前開発電気自動車「たま」に学ぶ，2023.7.28(金)，朝刊，p.18.）に、企画展開催の記事が掲載された。記事掲載日以降複数の電話の問い合わせや多数の見学者が来館されたが、次のような出来事があった。

2023年8月15日(火)、新聞記事を読まれて府中市から来館されたご夫婦がいた。「たま電気自動車」に興味を持った2人は、府中市図書館や博物館を訪ね、調べた。しかし、「たま」が製造されていた場所を知ることはできなかったと言う。たま電気自動車が製造されていた場所を確認するため、PTU図書館に来館されたのである。

さらに、第1部の開催も折り返しを迎えた8月16日(水)の朝日新聞（戦後EV開発先頭に「たま」がいた，朝刊，p.17.）に、2度目の記事が載った。朝日新聞の効果は更に大きく、東京都世田谷区、足立区、千葉県我孫子市、柏市という想定の範囲を越える地域からの見学者や、「新聞を見た」と言って来館される見学者が確かに増加した。第1回企画展では近隣住民を主に153人の見学者であったが、第2回企画展では累計545人に上った。第1回と第2回の見学者数を比較すると、392人の増加となった。

そして、朝日新聞掲載後には次の出来事が起きた。2023年9月6日(水)午後、朝日の記事で企画展開催を知った世田谷区在住の男性が来館された。

男性は、プリンス自動車関係者で作る「プリンス懇話会」の幹事で、プリンス自動車の歴史を個人で調べ、資料にまとめられている。当日は、「たま電気自動車」の整備を担当していた男性を同伴しての見学であった。この男性との交流は現在も継続中で、後に貴重な資料の寄贈などにつながることになる。

2　反響を受けた図書館の対応

ここでは、特に前記1の2つの出来事へのPTU図書館の対応について記述する。

⑴　府中市からの見学者への対応

8月15日見学当日、「たま電気自動車」の製造場所は、「北多摩郡府中町(当時)の立川飛行機関連会社の工場」という情報を把握しているのみで、製造場所の特定はできていなかった。見学者からの質問に回答できる情報はなく、レファレンスサービスは「後日回答」と未解決にせざるを得なかった。

⑵　世田谷区からの見学者への対応

男性は9月6日の午後1時頃来館された。PTU図書館所蔵の『自動車技術會報』第2巻第4号（1949）などの現物資料に強い興味を示し、見学時間は2時間以上となった。

展示資料に関する質問・応答、男性が収集された資料の説明、男性と図書館員双方の会話が弾む中、「たま電気自動車の製造場所」の話題になり、男性が約2年間かけて収集した資料から現在の「府中市晴海町2丁目、JR武蔵野線北府中駅近くの北府中公園の一角」にあったことが判明した。男性の資料提供によって、府中市からの見学者の「質問」に対する「回答」を得ることができた

のである。

3　貴重な資料の寄贈

1人の男性の企画展見学から始まった関係は、さらに新たな方向に進展する。「プリンス懇話会」というプリンス自動車OBのネットワークに乗って、国分寺市在住の男性、世田谷区在住の女性などへと関係が広がっていく。女性は、日産プリンス自動車販売が発行していた雑誌「PRINCE」（図2）の編集長だった。自宅には自身が編集したものを含む、1973年～1990年の18年間分の同誌が保管（合計189冊）されていた。

「PRINCE」は、既納車管理（ユーザーとのコミュニケーション維持など）のために発行された雑誌で、先代のプリンス自動車販売から数えて通巻506号にのぼる。同誌にはスカイラインなどの自動車情報、フェア開催告知と招待状と、それだけでなく、作家遠藤周作氏の様々なジャンルの著名人との対談コーナーや、人気のスポーツ、話題のファッション紹介コーナーもある。毎月70万部（ピーク時は120万部）発行されたという。雑誌における告知ページを利用した、記念品の配布やオリジナルファッションの販売という文化を創ったとされている。たとえば、「幸福の木」、「ケンとメリーのTシャツ」などが一世を風靡した[5]。自動車に限らず、当時の生活、文化、世相、流行を知ることができる一大資料である。

女性は、自身が所蔵する資料を託せる機関を長年探しており、懇話会の仲間にも相談していた。企画展を見学した男性らは、女性にPTU図書館を訪問することを勧めてくれていたのである。

企画展第2部開催中の2023年12月6日（水）、女性はPTU図書館を訪問された。企画展と図書館の様子を見学しながら、所蔵資料や寄贈の思いなどを話してくれた。その後、女性から自宅に保管中の「PRINCE」全冊寄贈の申し出をいただいたのである。

なお、同誌寄贈の経緯とともに当日の様子は、朝日新聞（「たま」がつないだ縁　車雑誌寄贈，2023.12.12，朝刊，p.20.）に詳報されている。

図2　雑誌『PRINCE』（2024.8.29 撮影）

Ⅳ　第2回PTU図書館企画展の成果

ここでは、見学者へのアンケート調査や、見学者との会話メモ、新聞取材時の資料などに基づき、第2回企画展の成果を整理する。

1　地域への貢献と学生の教育への寄与

第2回企画展の成果の第1点目は、地域への貢献と学生の教育への寄与である。

第2回企画展の開催日数は延べ91日間、見学者数は累計545人であった。第1回と比較すると392人の増加となった。

また、見学者545人のうち、168人からアンケートの回答（回答率31%）を得た。回答者の73%（123人）は一般市民、総合課程学生は16%（26人）、教職員等は11%（19人）となっている。アンケート調査から推計すれば学外からの見学者は398人となり、第2回企画展では約400人の市民の方々に生涯学習の機会を提供できたことになる。これは地域における生涯学習への大きな貢献といえよう。

さらに、企画展の評価を調べてみると、97%（163人）が「とても面白かった」・「面白かった」と回答している。見学者からは、企画展について高い評価と満足感を得ていることが見て取れる。

一方、学生への教育では、機械専攻教員からの申し出を受けて、企画展第1部と第3部開催中にそれぞれ1回、機械専攻1年生21名を対象にした特別見学会や、一般教育科目「地域研究」（1年生88名対象）では、2023年9月8日（金）1時限目、3号館1階大教室で企画展を題材に資料の収集方法、資料のまとめ方、参照文献の表記方法などの講義、を図書館員が担当した。

PTU図書館では学生に多様な学びの機会を提供するため、教員との連携・協働とともに、図書館として学生への学習支援に第2回企画展開催（2023年度）以降積極的に取り組んでいる。これらの取組みの結果、企画展に他大学の友人を連れて来る、次年度の企画展の内容を確認に来る、図書館ガイダンス（資料検索）を自ら進んで受講する、という能動的な学習行動が確認されている。

2　図書館機能の向上

第2回企画展の成果の第2点目は、図書館機能の向

上をもたらしたことである。

図書館の主な機能は、①利用者の求めに応じて資料を提供する、そのために、②資料を予め取り出し易いように収集・整理・保存する、そして利用者の学習支援や資料の利用を図るために、③レファレンスサービス（利用者の質問を受付け・回答する）、という3点である。

第2回企画展開催中に、1人の見学者が収集した資料によってたま電気自動車が製造されていた場所（製造工場）を特定できた。これによって、PTU 図書館の「たま電気自動車」に関する資料（地域資料）の収集・保存という機能（前記②）、レファレンスサービスの機能（前記③）、の2つが向上したのである。

さらに、雑誌「PRINCE」189冊（1973年1月号～1990年7月号）が寄贈された意義は、日産自動車との合併で 1966 年に消えたプリンス自動車工業と同自動車販売、日産自動車販売との統合で 1986 年に消えた日産プリンス自動車販売にゆかりの資料が収集・保存できたことにある。既に存在しない一時代を築いた企業の歴史を残す、企業の消滅とともに散逸する恐れの高い資料を収集・保存するという役割は、図書館として今後益々重要になるであろう。今回PTU図書館がその役割を果したことは、誇るべき大成果と評価できよう。

3　人的ネットワークの構築

第2回企画展の成果の第3点目は、貴重な資料の収集・保存へとつながる人的ネットワークの構築である。

1人の見学者との関係は、その後プリンス自動車工業、プリンス自動車販売ゆかりの方々とのネットワークへと発展し、日産プリンス自動車販売が発行していた雑誌『PRINCE』通巻506号のうち、1973年1月号～1990年7月号189冊(P34,図2)の寄贈につながった。

そして、このネットワークは、関係者の努力によって進化（深化）・拡大している。たとえば、2025年4月12日(土)プリンス懇話会主催の OB 会で、PTU 図書館企画展や雑誌『PRINCE』寄贈の紹介、PTU 図書館への資料寄贈の勧奨が懇話会幹事から行われた。

同会幹事からは、「まだまだ寄贈する資料が出て来る」との情報を得ている。

Ⅴ　成果をもたらした要因

ここでは、前記Ⅳで整理した第2回企画展の3点の成果をもたらした要因について考察する。

1　新聞報道

第2回企画展の成果をもたらした要因の第1点目は、企画展開催期間中3度の新聞報道である。

①東京新聞(76年前開発電気自動車「たま」に学ぶ，2023.7.28，朝刊，p.18.)、②朝日新聞（戦後EV開発先頭に「たま」がいた，2023.8.16，朝刊，p.17.)、③朝日新聞（「たま」がつないだ縁　車雑誌寄贈，2023.12.12,朝刊，p.20.)、これらの新聞報道は第2回企画展を広く周知することになり、想定の範囲を越える地域から多数の見学者が来館されることになった。

また、報道後の問い合わせの増加、「新聞を読んだ」と言う見学者の反応などを見れば、新聞報道によりPTU図書館の地域における存在感は一層大きく、重厚になったことは間違いないであろう。

2　図書館員と見学者のコミュニケーション

第2回企画展の成果をもたらした要因の第2点目は、図書館員と見学者の間に成立した有意義なコミュニケーション（相互理解）である。

ある見学者が投稿したSNSには、「デニムのエプロンをつけた司書さんががっつり親切に説明してくれるので楽しい」との記述が確認できる。また、別の見学者のアンケートの自由記述には、丁寧な説明に感謝するコメントが確認できる。これらは、図書館員と見学者の間に相互理解が成立した証と考えられよう。

第2回企画展において、見学者の声に耳を傾け、しっかりと向き合い、質問に的確に応える図書館員の姿勢が見学者の共感を呼び、図書館員と見学者の間に有意義なコミュニケーションが成立した構図が見えてくる。図書館員と見学者の間に信頼関係が築かれた結果、満足感の高い企画展という評価や貴重な資料の収集・保存につながったと言えよう[(6)]。

3　図書館の主体的、能動的サービスの実践

第2回企画展の成果をもたらした要因の第3点目は、PTU図書館として主体的、能動的サービスの実践を常に心がけていることである。

図書館は、従来利用者の求めに応じて資料を提供するという受動的な役割を担ってきた。第2回企画展の題材を「たま電気自動車」としたきっかけは、九州産業大学図書館の文献複写依頼であった。従来であれば、複写資料を依頼館に送付して業務完了となる。しかし、今回は、図書館員が依頼の意図に関心を持ち調査した。その結果、PTU図書館が「1940年代の電気自動車の時

代」を示す資料を所蔵していることが確認され、これが企画展開催へと繋がったのである。

また、府中市からの見学者の来館当日には、たま電気自動車の製造場所に関する質問に回答できなかった。それでもなお、図書館員は関連資料の調査（資料収集）を継続しながら、企画展（情報発信）を続けた。その結果、世田谷区からの見学者が企画展を知るところとなり、製造場所に関する資料を PTU 図書館が収集できたのである。この事実は、図書館員が主体的、能動的に図書館サービスを提供した結果、見知らぬ府中と世田谷の見学者を「たま電気動車」を介して繋いだ証左と理解できよう。今回の成果は、PTU 図書館が常に主体的、能動的に図書館サービスを実践していることの成果であると言って間違いないであろう。

Ⅵ　おわりに

本稿の目的は、第 2 回 PTU 図書館企画展における実践を振り返り、その成果と成果をもたらした要因を考察するとともに、今後の PTU 図書館の展望と課題についても報告することであった。

考察の結果を端的に整理すれば、Ⅳにおいて第 2 回企画展の成果を、①地域への貢献と学生の教育への寄与、②図書館機能の向上、③人的ネットワークの構築、の 3 点に整理した。さらに、Ⅴにおいて 3 点の成果は、①新聞報道、②図書館員と見学者のコミュニケーション、③図書館の主体的、能動的サービスの実践、という 3 つの要因がもたらしたことを明らかにした。

以上のように、第 2 回企画展に 3 点の大きな成果をもたらした 3 つの要因を明らかにしたことは、大学図書館の学習支援機能が注目される現代にあって、企画展を成功裏に導く 1 つの方法を示したという意義が認められよう。特に、PTU 図書館の事例を報告・共有することにより、職業能力開発大学校や職業能力開発短期大学校の図書室（資料室）にとっての好事例になるという意味でも大きな意義を持つと考えられよう。

終わりに、主体的、能動的な学習支援が求められる時代を切り拓くことを目指す PTU 図書館の展望と課題について述べる。

第 1 に、図書館企画展の継続と発展について、その展望を述べる。第 2 回企画展の実践で培った成果を大切に活かしながら PTU 図書館企画展の継続・充実を図り、図書館併設の多目的学習室をサロン（サイエンスカフェ）化して発表会、勉強会を開催するなど、学生・教職員と地域住民の方々との交流（生涯学習）の拠点になるよう取組みたい。少子化の影響から、大学・大学校を取り巻く環境は一層厳しさを増すことは間違いない。サイエンスコミュニケーションの動向を鑑みると、多目的学習室のサロン化は学校の存在感向上に資すると考える(7)。

第 2 に、学生の教育への寄与について、その展望と課題を述べる。2023 年度から取組んでいる一般教育科目「地域研究」でのリサーチスキル、ライティングスキルの向上を目指した授業の実施など教員との連携、PTU 図書館員による授業支援の継続と機会の拡大に取組みたい。多様な学習機会の確保は学生の興味・関心を喚起し、その結果、学生に深い学びをもたらすことになるであろう。学生の主体的な学びの促進、学習の質保証の観点からも授業支援の継続と機会の拡大は重要な取組みであると考えられる。そのためにも、PTU 図書館として「常に主体的、能動的に奉仕する姿勢」を保持し続けることが課題になると考える。

[参考文献]

(1) 岩﨑千晶、川面きよ、遠海友紀、佐藤栄晃、村上正行：「日本の 4 年制大学におけるラーニングコモンズの学習支援に関する悉皆調査」、『日本教育工学会研究報告集』、第 19 巻第 1 号、2019、pp. 435-438。
(2) 米澤誠：「広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法」、『情報の科学と技術』、第 55 巻第 7 号、2005、pp. 305-309。
(3) 小林奈緒子：「2017 年度島根大学附属図書館企画展示「戦争と平和を考える 2017-記録された戦争体験-」実施報告」、『淞雲：島根大学附属図書館報』、第 20 号、2018、pp. 51-66。
(4) 鯨井正子：「2019 年度音楽教育研究ゼミの活動-国立音楽大学附属図書館企画展示「N コン課題曲のこの 10 年」の記録-」、『研究紀要』、第 55 巻、2021、pp. 183-188。
(5) 宇佐美達夫、細越高敏：「PR 誌「プリンス」物語」、『プリンスの思い出』、1991、pp. 207-212。
(6) 村越貞之、廣木菜穂美：「図書館員と見学者のコミュニケーションがもたらしたもの～2023 年度（第 2 回）職業能力開発総合大学校図書館企画展の実践から～」、『日本図書館情報学会研究大会発表論文集』、第 72 回、2024、pp. 61-62。
(7) 村越貞之、廣木菜穂美：「職業能力開発総合大学校の社会貢献-PTU 図書館における実践から-」、『技能と技術』、第 2 号/2024、2024、pp. 23-28。